

コラボレーション発話行為文としての「裸のハ」構文

Topic Particle Stranding in Collaborative Conversations

三 原 健 一

MIHARA Ken-ichi

1. はじめに

「裸のハ」構文とは、話者 A が話題 X（以下、下記の（1A）のように二重線で示す）を、典型的には疑問文の形で導入し、それを受けた話者 B が、X を音声化せずに（以下、 \varnothing で表示）、主題標識「は」のみを残留させる（1）のような構文を指す。¹

（1）A：広田はどうした？

B： \varnothing は ...、もう帰りました。

当該「構文」は、1 人の話者の発話だけでは完結せず、2 人の話者による発話の総体で成立するという特性を有する。では、構文ではなく談話ではないかと思われるかもしれないが、後に述べるように、2 人の話者が共同して作り上げる「構文」であると考ええる。

（1A）の発話に後続する文としては、（2a）のように話題を繰り返して「広田は」とするか、あるいは、（2b）のように「広田は」をすべて省略する方が通常であるが、敢えて「は」のみを残す点にこの構文の特徴がある。

（2）a. B：広田は、もう帰りました。

b. B：もう帰りました。

さらに、この構文には音声的な特徴もある。「裸のハ（ \varnothing は）」の後に、音声的な引き伸ばし（（1B）のように「...、」で示す）があり、かつ、「は」に強勢がくるのが普通である。

ところで、「裸のハ」構文と一見類似する、「共同発話（co-construction）」と呼ばれる談話がある。（3）のようなものである。

1 本稿は、日本語文法学会第 17 回大会（2016 年 12 月、於神戸学院大学）における口頭発表を、加筆・修正したものである。ここに至る様々な段階で有意義なコメントをいただいた、有田節子、甲斐ますみ、野口雄矢、野田尚史、三宅知宏の諸氏、及び 2 名の査読者の方々に感謝申し上げる。本稿で扱う現象については、「主題標識残留（Topic Particle Stranding; Nasu 2012）」と呼ぶこともあるが、有田（2009, 2015）に倣い「裸のハ」と称する。なお、アルファベット大文字表記（A・B）については、「話者」と、その話者による「発話」の双方の意味で用いる。「は」のみが残るタイプの他に、他の取り立て詞（「も」「って」など）が残留するものや、後置詞（「に」「で」など）が残留するものもあるが、現段階ではデータ整備が不十分なので、本稿では「は」タイプのみを扱うことにしたい。

(3) A：行ってもいいんだけど、

B： また行くのはめんどくさい？

(ザトラウスキー 2003: 50、表記法は筆者が一部変更)

(3) は B が友人 A を飲みに誘っている電話による発話の例である。B は、自分が飲んでいる場所へ A を誘っているのだから、本来ならば「来る」とすべきであるところを、A の視点から「行く」と表現している。共同発話とは、このように、複数の話者が「共同」して作り上げる発話である。しからば、「裸のハ」構文も、共同発話の 1 タイプであると思われるかもしれない。しかし、以下で詳述するように、「裸のハ」構文は、文タイプの制限や「裸のハ」の生起位置の制限など、共同発話より厳しい制限が課される構文であり、別に論じた方が「裸のハ」構文の特質を明示化できると思われる。

さて、本稿は、「裸のハ」構文が示す以下の諸点に注目して、当該構文の姿を浮き彫りにすることを目的としている。²

- ① A 及び B の発話には文タイプの制限が課される。
- ② 主文で生じることが多いが、従属節でも起こる場合がある。
- ③ いわゆる左周縁部現象であり、「 φ は」は文頭でのみ起こる。
- ④ 「 φ ハ」の「は」には強勢がくる。

以下、2.1 節で①、2.2 節で②、2.3 節で③の問題を論じ、最後に、2.4 節で④の問題を扱うことにしたい。

2. 「裸のハ」構文の特質

2.1 コラボレーション発話行為文

「裸のハ」構文において、A の発話は疑問文であることが多い。そして、B の発話としては、(4a) の平叙文、(4b) の命令文、(4c) の勧誘文などは可能だが、(4d) の疑問文はかなり落ち着きが悪い。

(4) a. A：その指輪は誰が見つけたの？

B： φ は ... 、私が見つけました。(平叙文)

b. A：この本は誰に返せばいいの？

B： φ は ... 、ジョンに返しなさい。(命令文)

c. A：練習はいつ始めるの？

B： φ は ... 、今すぐ始めよう。(勧誘文)

2 これらの諸点の中には、註 1 で挙げた有田論文や Nasu 論文などにおいて、現象自体は既に指摘されているものもある。本稿は、先行研究では気付かれてこなかった新たなデータを発掘すると共に、先行研究の知見に対して、生成文法の観点からの理論的裏付けを施すことを目的としている。

d. (電話での会話) A: ジョンはもう家を出ましたか?

B: * φ は...、まだそちらに着いていないんですか? (疑問文)

(Nasu 2012: 219)

発話 A が、形式的には疑問文でない (5) などもあり得るが、これは、「どうする、買う?」といった発話が省略されているもので、実質的には疑問文と考えてよい。^{3 4}

(5) A: うん、あの一、指導書、教え方の手引き。

B: φ は...、抜いて。 (有田 2015: 10、談話データの一部を筆者が抜粋した)

ただ、疑問文の場合に比して有標的ではあるが、発話 A が疑問文でないものも可能である (甲斐ますみ氏 (個人談) の指摘による。ただし文例は筆者)。

(6) a. A: あれ? ユーミンの CD も持ってるんだ。

B: φ は...、むかし、一時期はまっちゃって。

b. A: おい、聞いた? 山田のヤツ、左遷だってよ。

B: φ は...、いろいろやらかしたからねえ。

しかし、これらの場合でも、(6a) では「君のイメージに合わないけど、どうして?」、(6b) では「どう思う?」といった、「隠れた疑問文」が介在するように筆者は感じる。

ともあれ、全体的な構図は次のようになっている。

(7) A: X (談話主題 X の導入)

B: $\varphi_{(X)}$ は...、..... Y (焦点要素 Y の提示)

すなわち、「裸のハ」構文とは、話者 A が談話主題 X を導入し (X は必ずしも「は」で標示されなくてもいい)、話者 B がそれを「裸のハ」として受け、焦点要素 Y を提示することにより、A と B が共同して「主題 (X) — 解説 (Y) 構造」を作り上げる「コラボレーション発話行為文」と言えるだろう。発話 B における $\varphi_{(X)}$ は A によって導入された「課題」であり、Y はその課題に対する、何らかの意味での「解決」である。堀川 (2012) の用語を借りれば、 $\varphi_{(X)}$ は「説明対象」であり、Y は「説明内容」であると言えよう。

2.2 断定

先行研究 (例えば Nasu 2012) では、「裸のハ」は主節で生じる、いわゆる「主節現象 (main

3 (5) は学生同士の会話で、日本語教育の教科書『みんなの日本語』の指導書 (学生には高価である) を買うかどうかという内容である。ちなみに、話者 B の「抜いて」は、「買わない」という意味である。

4 査読者から、次の B は疑問文であるにもかかわらず言えるが、A の問いのエコーとして機能しているように思われるというコメントをいただいた。

(i) A: 今日は、何が議題にあがってたっけ?

B: φ は...、どうでしたっけ?

それも十分考えられるのだが、別の可能性もあり得るかもしれない。A の問いに対して、B が議題を思い出そうとしたのだが果たせず、A の問いに答えるべく意図していた平叙文をそこで中止し、新たに「(さあ) どうでしたっけ?」という別の文を発話したという可能性である。

clause phenomena)」であるとされている。例えば、(8) の連体修飾節 ([] 部分) を含む文を見られたい。

(8) A: えっ? 重力波って?

B: *報道では、[φ は...、相対性理論が予測する]現象らしいよ。

ここにおいて、「 φ は」の容認性が非常に低いことが分かるだろう。連体修飾節以外でも、(9) (10) のように、従属節内に「 φ は」が生起している場合、発話 B の容認性が低い。

(9) A: 君、哲也に、美穂と別れるように論したんだって?

B: *うん、哲也のヤツ、[φ は...、金があてで付き合ってる]ことを見抜けないからね。

(10) A: 田中幹事長が 罷免 ですか?

B: *首相が、[φ は...、小池候補に批判的だった]ことに憤慨されて、ま、そういうことに。

ところが一方で、(11B) – (14B) のような従属節では「裸のハ」が可能である。

(11) A: いま、スイーツは何が人気あるの?

B: リサが、[φ は...、ロールケーキが人気だ]って言ってたよ。

(12) A: もんじゃ焼きねえ、大丈夫ですか?

B: 店長が、[φ は...、関西でもいける]って断言しましたよ。

(13) A: 晴臣は、来年テクノが流行ると思ってるみたいだけど、どうなの?

B: オレも、[φ は...、来年、かなりくる]と思うよ。

(14) A: あいつ、ちゃんとやるかなあ?

B: [φ は...、やる]と僕は信じたいね。

(9) (10) (及び (8)) と (11) – (14) の文法性の差は、一体何に起因するものなのだろうか。

鍵は一重下線で示した主節動詞にある。(9) (10) での「見抜く」「憤慨する」は、いわゆる叙実動詞 (factive verb) であり、これらの動詞が導く従属節は前提 (presupposition) を内包する。すなわち、これらの従属節には断定 (assertion) がない。⁵そして、(8B) の連体修飾節が非文となるのも、連体修飾節が主名詞に対する補足的情報を供給する節であり、ここには断定がないからである。⁶それに対して、(11) (12) の「言う」「断言する」は発話動詞、そして、

5 断定とは、簡単に言えば、話し手と聞き手の間で未だ共有されておらず、話し手が最も主張したい情報である。それに対して、前提とは、発話にあたって話し手と聞き手の間で共有しているとみなされる情報であり、話し手が最も主張したい情報ではないので、ここに断定が宿ることはない。断定と前提の観点からなされた詳細な述語分類については Hooper (1975) を見られたい。

6 Kuno (1973) の指摘以来、連体修飾節中に純粋主題は生じないが、対比主題は生起可能であることがよく知られている (下例において、対比主題であることをブロック体の「は」で示す)。

(i) 細川さんが[その本 *は / は]、入手できる]古書店を知ってますよ。

そして興味深いことに、純粋主題の「は」は次の (iiB) の応答において容認されないが、対比主題の「は」は許容されるようである。

(ii) A: (本のカタログを見ながら) これ、稀観本なんですけど、手に入らないですかねえ?

(13) (14) の「思う」「信じる」は思考動詞であり、これらが導く従属節は断定を有する（これらの従属節における断定の存在については、下記の例文 (16) 及び (18) で証明する）。

さて、これらの観察から得られる一般化は (15) である。

(15) 「裸のハ」は断定 (assertion) を有する文・節において生起可能である。

2.1 節で見た (4) – (6) において「裸のハ」が可能な理由も、もはや明白であろう。それらはいずれも主文 (独立文) であり、主文には断定が宿るのが通常だからである。

が、ここで、断定の在り処について確認しておこう。断定に関する古典的な論考としては、英語の付加疑問の研究がよく知られている。英語の付加疑問が、断定を有する節から作られることを明らかにしたのは、R. Lakoff, Hooper, Thompson といった研究者たちであった。従属節を含む例を 1 つだけ見ておこう。

(16) John supposes [the Yankees will lose again this year], {doesn't he? / won't they?}
(Hooper 1975: 103, 一部修正)

(16) において、付加疑問の doesn't he? は主節の John supposes から作られており、「ジョンはそう考えているんですね？」という問い返しが表明されている。付加疑問が主節から作られるのは、いわば無標の状況である。一方、付加疑問が従属節から作られる場合もあり、(16) における won't they? がこれに当たる。この場合、「(ジョンの考えによれば) ヤンキースは今年も負けるかもしれないんですね？」といった問い返しの意味となっている。ここで、主節動詞が思考動詞の suppose であることに注意されたい。付加疑問が従属節から作られるのは、その従属節が断定を有する場合に限られる、というのが Hooper の主論点である。Hooper による一般化を見よう (イタリックは筆者による)。

(17) “A tag question may be formed from the *main assertion* of a sentence if it is a speaker assertion about which the speaker may express doubt.”
(Hooper 1975: 105)

他方、日本語には付加疑問という形式は存在しないが、同等の機能を果たすものに「ね、そうですね？」という問い返し形式がある。これでテストしてみると、(18a) の発話動詞「断言する」と (18b) の思考動詞「思う」では、「ね、そうですね？」が主節内容を問い返す場合と、従属節内容を問い返す場合の 2 通りがあり得るが (問い返している部分を下線で示す)、(18c) の叙実動詞「見抜く」では主節内容のみが問い返しの対象となることが分かる。⁷

B1: *細川さんが[その本は、入手できる]古書店を知ってますよ。

B2: 細川さんが[その本は、入手できる]古書店を知ってますよ。

とすれば、対比主題を擁する連体修飾節には断定が宿り得ることになるが、今後慎重に検討したい。対比主題を考察対象に含める必要性について指摘していただいた査読者に感謝申し上げます。

7 (18c) において、「金めあてで付き合っていた」の部分を、極端に強いイントネーションを置いて読むと、「ね、そうですね？」がこの部分を問い返す解釈もあり得るように思われる。が、極端に強いイントネーションは文に「トリック」をかけるので、通常のイントネーションで読んだ場合の解釈に限定して考察する。

- (18) a. 店長が、[もんじゃ焼きは関西でもいける]って断言したんですね、そうですね？
 b. 晴臣は、[来年、テクノが流行る]って密かに思ってるんですね、そうですね？
 c. 哲也は、[美穂が金めあてで付き合っていた]ことを見抜けなかったんですね、そうですね？ ↑ ×

かくの如くして、「裸のハ」と断定の連動（一般化（15））は実証されると言える。⁸

2.3 「裸のハ」構文と左周縁部

「裸のハ」の生起位置が文頭に限られることはよく知られている。（19B2）のように文副詞の後には生起しないし、（20B2）のようにかき混ぜ句に後続する場合も容認性が低い。⁹

- (19) A：たぶん、父は反対するだろうね。
 B1：φは…、たぶん反対するだろうね。
 B2：*たぶん、φは…、反対するだろうね。（文副詞）
- (20) A：宮田君は何を発見したんですか？
 B1：φは…、ヒグス粒子を発見したんですよ。
 B2：*ヒグス粒子を、φは…、発見したんですよ。（かき混ぜ句）

8 この結論に対して、命令文は多少やっかいな問題を提示する。2.1節の（4）で見たように、発話Bは、平叙文、勧誘文、命令文では可能であったが、疑問文では成り立たなかった。そして、本論では扱わなかったが、「頑張ろう」などが述語となる意志文は「裸のハ」が可能なグループに、「なんて素晴らしい光景だろう」などの感嘆文は不可能なグループに属する。

- (i) a. A：ロケ、どうしますか？
 B：φは…、明日、頑張ろう。
 b. A：あ、富士山、見える？
 B：*φは…、なんて素晴らしい光景だろう！

以上のことが、断定の有無と連動しているのは明白である。

- (ii) a. 平叙文・勧誘文・意志文 → 断定有
 b. 疑問文・感嘆文 → 断定無

しかし、命令文に、少なくとも平叙文などと同等の断定があると言えるだろうか？

ここで留意すべきは、命令文には主語指向性副詞（Jackendoff 1972, 中右 1980）が可能なことである。

- (iii) a. もっと楽しそうに踊れ！
 b. 自ら進んでボランティアに参加しろ！
 c. そんな物知り顔で言うな！
 d. 憤慨し過ぎてボロを出すな！

主語指向性副詞には、価値判断の主語指向性副詞（「懸命にも」「みごとに」など）と、様態の主語指向性副詞があるが、(iii)で見るのは様態タイプである。このタイプ的主語指向性副詞は、動作主としての主語の動作の様態を描写するものである。(iii)で主語指向性副詞が可能だということは、命令文には、（音声化されていない）主語の意志が関与し得るということである。Platzack and Rosengren (1998)は、平叙文などの主語は、それについて語る対象（talked-about subject）であるが、命令文の主語は、それに対し語る対象（talked-to subject）であるという、非常に興味深いことを述べている。「裸のハ」を伴う命令文は、当為文（「φは…、……べき（もの）だ」を talked-to subject に対して「述べる」ものであり、その意味において断定を有すると考えておきたい。

9 ただし、「はい／うん」「いいえ／いや」などの応答表現や、「あ」などの感嘆詞の後には生起できる。

また、間に別の話者Cが介在する場合、その後のBの発話に生じる「 φ は」の容認性が低い。従って、生起位置については、正確には「隣接する発話の文頭」とすべきであろう。

(21) A: えーっと、村田君はどこの大学の出身だったかな？

C: 部長は慶応大とおっしゃっていたように思います。

B: *いや、 φ は...、早稲田の出身です。

左端位置に限定された生起は、カートグラフィ (cartography; Rizzi 1997) の意味での、左周縁部 (left periphery) を思い起こさせる。カートグラフィとは、従来 CP として一括されてきた範疇を細分化し、主題や焦点などの談話情報をも句構造に取り込み、統語構造における左周縁部 (文頭領域) の「地図」を精緻に製作しようとする句構造理論である。Rizzi (1997) は、イタリア語を基にして詳細な構造を立てているが、本稿では、簡略化した下記の構造を仮定する。

(22) [_{ForceP} ... [_{TopP} ... [_{FocP} ... [_{FinP} ... [_{TP} ...]]]]]

ここにおいて、「裸のハ」は主題句であるので、TopP (TopicP) 中に生じているのではないかと思えるかもしれない。が、間接引用の「と」が関わる言語事実を勘案すると、どうも、もっと上位に生起しているようである。¹⁰ 斎藤 (2013) は、間接引用の「と」は、ForceP の上位にある ReportP の主要部 (Report) であるとしている。

(23) [_{ReportP} ... [_{ForceP} ... [_{Report} と]]

さて、言語事実は下記の通りである (間接引用であることを明示するために、斎藤 2013、野口 2016 に倣い、節内に代名詞を置く)。まず、間接引用の「と」節が ForceP を埋め込めることを確認しよう。(24a) の従属節は平叙文、(24b) のそれは間接疑問文であり、いずれも、発話の力 (Force) を内包する文タイプである。

(24) a. 太郎_i は [_{ForceP} 花子は彼_i の主張を意図的に曲解している] と] 言った。

b. 太郎_i は次郎_j に [_{ForceP} 花子は彼_{i/j} の家に来る (の) か] と] 尋ねた。

次に、間接引用の「と」節の補文中に「裸のハ」が生起可能である。

(25) a. A: 太郎_i は花子のことを何か言っていましたか？

B: ええ、[φ は ... 、彼_i の主張を意図的に曲解している] と] 言っていましたよ。

b. A: 太郎_i は次郎_j に花子のことを何か尋ねましたか？

B: ええ、[φ は ... 、本当に彼_{i/j} の家に来る (の) か] と] 尋ねました。

以上の事実は、「裸のハ」が ForceP の節頭に生起していることを示唆するが、(25a, b) における「 φ は」が、TopP の節頭に生起している可能性も排除できないので、さらなる言語事実で補強する必要がある。

まず、「裸のハ」以外に、別の主題句が現れ得ることに注意されたい。(26) では、状況主題

10 間接引用の「と」に関する議論は斎藤 (2013) に基づく。ただし、斎藤は、「間接引用の「と」」ではなく、「直接引用の言い換えを示す補文標識」と呼んでいるが、「間接引用の「と」」と同義であると理解する。

「明日」を「 φ 」で受けると同時に、別の主題「僕は」が生じている。主題句「僕は」は TopP 中に生じると考えられるので、「 φ は」はそれより上位にあることになる。

(26) A: 明日、どうしてる？

B: φ は ...、僕は家にいるよ。

さらに、場面を設定する場所句 ((27B) での「香港の国際学会で」) と時間句 ((28B) での「明治時代の初めに」) は、TopP 中に生起して 'scene-setter' としての機能を果たすと考えられるが、「裸のハ」はそれより左に生じる。

(27) A: 野口さんは何を発表するんだろう？

B1: φ は ...、香港の国際学会で、主題文について発表するらしいよ。

B2: *香港の国際学会で、 φ は ...、主題文について発表するらしいよ。

(28) A: チョコレートはいつから日本にあるんだろう？

B1: φ は ...、明治時代の初めに、ベルギーから輸入されたんだ。

B2: *明治時代の初めに、 φ は ...、ベルギーから輸入されたんだ。

次に、念のため、「裸のハ」が FocP 以下の「CP 領域」には生じないことを確認しておこう ((22) を再度見られたい)。文副詞は FinP (FiniteP) 要素であると考えられるが (三原 2015)、既に見たように、「裸のハ」は文副詞の左に生起する。下に再掲する (19B2) から、「裸のハ」が FinP より下位にはないことが分かる。間接引用の「と」節中に文副詞と「裸のハ」が生じる例も (29) で見ておこう。

(19) A: たぶん、父は反対するだろうね。

B1: φ は ...、たぶん反対するだろうね。

B2: *たぶん、 φ は ...、反対するだろうね。

(29) A: 太郎は花子のことを何か言っていましたか？

B: ええ、[φ は ...、明らかに、彼の主張を意図的に曲解している]と言っていましたよ。

さらに、これも既に見たように、「裸のハ」はかき混ぜ句の右に生じることができない。かき混ぜ句は FocP (FocusP) 領域に着地するので、(20B2) (下に再掲) から、「裸のハ」が FocP より下位にはないことが分かる。

(20) A: 宮田君は何を発見したんですか？

B1: φ は ...、ヒグス粒子を発見したんですよ。

B2: *ヒグス粒子を、 φ は ...、発見したんですよ。(かき混ぜ句)

以上のことを総合すると、「裸のハ」の生起位置は、(30) のように ForceP 領域とするのが自然であろう。「裸のハ」以外の別の主題句は、生じる場合には TopP 領域に生起する。

(30) [_{ForceP} φ は ...、[_{TopP} (NP は) [_{FinP} 文副詞 [_{FocP} かき混ぜ句 [_{TP} ...]]]]

有田 (2015) は、「裸のハ」が係助詞から感動詞への移行途中にあり、談話管理標識としての役割も担いつつあると述べている。「裸のハ」が、発話の力を担う ForceP 領域に生じるという上

記の結論は、この言明と響きあうものであろう。

2.4 擬装対照主題

最後に、「裸のハ」は、純粹主題であるにもかかわらず（すなわち対照主題ではないにもかかわらず）、強勢を持つという点について簡単に論じておこう。純粹主題の場合、例えば「轟はまだ学生です」において「は」に強勢を置く必要はないが、「轟」を、既に社会人である「指原」や「前田」と対照させる文脈では、「は」に強勢が置かれる。

さて、下記（31a-c）の発話 B において、「裸のハ」は発話 A から引き継いだ談話主題であり、「は」を特に強めて発話しない限り対照解釈になることはない。例えば（31b）で、眼前に指輪が幾つかあり、そのうちの1つを指して「その指輪は」と言っている訳ではない。それにもかかわらず、「 ϕ は」の「は」には強勢がくるのが普通である。

- (31) a. A: 広田はどうした？
 B: ϕ は...、もう帰りました。
 b. A: その指輪は誰が見つけたの？
 B: ϕ は...、私が見つめました。
 c. A: おい、聞いた？ 山田のヤツ、左遷だってよ。
 B: ϕ は...、いろいろやらかしたからね。

「裸のハ」は、本来、純粹主題であったものを、話者 A と話者 B が共同して作り上げるコラボレーション発話の中で際立たせるために、あたかも対照セットがあるかのように、対照主題を「擬装」して強勢を置くものであろう。¹¹ このことが「裸のハ」において起こり得るのは、話者 A の発話に対して話者 B の発話を持つ、コラボレーション発話行為文としての強い「結束性」の故であると考えられる。「裸のハ」は、いわば、話者 A と話者 B の発話を結束させる「軸」の役割を果たすと言えよう。「裸のハ」構文は共同作業による発話行為文なのである。

3. 結語

本稿では以下のことを論じた。

- ① 「裸のハ」構文は、話者 A が談話主題 X を導入し、話者 B がそれを「裸のハ」として受け、焦点要素 Y を提示することにより、A と B が共同して主題—解説構造を作り上げる「コラボレーション発話行為文」である。
- ② 「裸のハ」は断定を持つ文／節に起こる。主文は、断定を有するのが無標の状況なので、多くの場合「裸のハ」を許容するが、従属節の場合は、発話動詞・思考動詞など、それらが導く従属節に断定が宿り得る場合のみ「裸のハ」を許す。

11 その意味において、尾上（1995）の言う、「は」の「額縁効果」に類するとも言えるかもしれない。

- ③ 「裸のハ」は、話者 A と話者 B の発話を結束させる「軸」の役割を果たし、話者 B の発話中で、発話の力を有する ForceP 領域に生起する
- ④ 「裸のハ」は、純粋主題であるにもかかわらず強勢を持ち、音声化されない「 \varnothing 」を発話の中で際立たせるために、あたかも対照セットがあるかのように対照主題を「擬装」するものである。

参考文献

- 有田節子 (2009) 「「裸のハ」についての覚え書き」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』 Vol.16.
- 有田節子 (2015) 「日本語疑問文の応答の冒頭に現れる「は」について：係助詞から感動詞へ」『国立国語研究所論集』第 9 号.
- Hooper, Joan B. (1975) On Assertive Predicates. In J. Kimball (ed.) *Syntax and Semantics* 4. Academic Press.
- 堀川智也 (2012) 『日本語の「主題」』 ひつじ書房.
- Jackendoff, Ray S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*. MIT Press.
- 三原健一 (2015) 『日本語の活用現象』 ひつじ書房.
- 中右実 (1980) 「文副詞の比較」、國廣哲彌 (編) 『日英語比較講座 2：文法』 大修館書店.
- Nasu, Norio (2012) Topic Particle Stranding and the Structure of CP. In L. Aelbrecht, L. Haegeman and R. Nye (eds.) *Main Clause Phenomena: New Horizons*. John Benjamins Publishing Company.
- 野口雄矢 (2016) 「日本語の命令文における主題化空主語の認可について」『日本言語学会第 152 回大会予稿集』.
- 尾上圭介 (1995) 「「は」の意味分化の論理：題目提示と対比」『月刊言語』第 24 卷 11 号.
- Platzack, Christern and Inger Rosengren (1998) On the Subject of Imperatives: A Minimalist Account of Imperative Clauses. *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 1.
- Rizzi, Luigi (1997) The Fine Structure of the Left Periphery. In L. Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*. Kluwer Academic Publishers.
- 齊藤衛 (2013) 「日本語埋め込み文の意味的・談話的性質：比較統語論への招待」、池内正幸・郷路拓也 (編著) 『生成言語研究の現在』 ひつじ書房.
- ザトラウスキー、ポリー (2003) 「共同発話から見た「人称制限」、「視点」をめぐる問題」『日本語文法』第 3 卷 1 号.